

全酪連会報 ⑨

2026 SEP No.732

酪農とのかけはし／大島智典先生、佐藤寿一さん

第77年度(令和8年度)通常総会開催される 詳細報告

第53回 全国酪農青年女性酪農発表大会 酪農意見・体験発表の部

日本酪農見て歩紀／松尾牧場(大分県日田市)

全酪新報ダイジェスト版

酪農トピックス



全酪連 定期刊行物のご案内

バックナンバーはQRコードから
閲覧いただけます。



全酪連会報

⇒ <https://www.zenrakuren.or.jp/kaiho/>



COWBELL

⇒ <https://www.zenrakuren.or.jp/cowbell/>

フォローして最新情報をチェック /

全酪連

X公式アカウント

はじめました!

@zenrakuren



全国酪農業協同組合連合会

酪農との かけはし



栃木県立那須拓陽高等学校

実習教諭

第63回 大島智典 先生

農業経営科3年

佐藤寿一 さん

次代の農業・ 酪農を担う人材 を育成



栃木県立那須拓陽高等学校を訪ねて

今回ご紹介するのは、日本有数の酪農地帯である栃木県那須塩原市に位置する栃木県立那須拓陽高等学校です。

同校は1945年（昭和20年）4月に栃木県立那須農学校として開校して以来、地域の基幹産業である農業を支える多くの人材を輩出してきました。校内には畜産を中心とする「乃木農場」と、耕種部門を中心とする「大山農場」の2つの実習フィールドが整備されており、生徒たちは実践的な学びを通じて知識と技術を身に付けています。

今回は、乃木農場で指導にあたる実習教諭の大島智典先生と、農業経営科3年の佐藤寿一さんにお話を伺

いました。

放課後も牛と向き合う「牛部」の活動

乃木農場での実習では、哺乳や除角、去勢など、牛の飼養管理に関するさまざまな技術を学ぶことができます。しかし、那須拓陽高校で牛について学べるのは授業時間だけではありません。

放課後には「牛部」が活動しており、共進会や和牛甲子園での上位入賞を目標に、月曜から金曜まで週5日活動しています。牛部では日々の飼養管理に加え、実習だけでは得られない高度な知識や技術の習得にも取り組んでいます。

活動内容は牛の管理にとどまりません。和牛甲子園では、自校で育てた牛をふるさと納税返礼品として活用

する提案を全国の参加者の前で発表するなど、プレゼンテーション能力や発信力を養う機会にもなっています。

1年生から牛部に所属する佐藤さんは、活動を通じた成長について次のように話します。

「部員みんなで育ててきた牛が共進会で入賞した時は大きな達成感があります。また、部活動を通じてコミュニケーション能力が向上したと

感じていますし、牛を飼う上で欠かせない観察力も身に付いたことが大



きな成長だと思っています。」

牛部での日々は、技術の習得だけでなく、仲間と目標に向かって切磋琢磨する貴重な経験の場となっているようです。

また、佐藤さんは北海道中標別町計根別農協のご協力で1961年（昭和36年）から続く北海道酪農実習も参加されたそうです。

課題研究で広がる学びの可能性

同校では毎年、課題研究の成果発表会が行われています。生徒たちは1年間取り組んできた研究内容を発表し、学びの成果を共有します。

佐藤さんは肥育をテーマに研究に取り組みました。

「実家は酪農を営んでいます。これまで経験したことのない分野に



も挑戦したいと思い、肥育に取り組みました。」

自身の専門分野に加え、新たな領域にも積極的に挑戦できる環境が整っていることも、同校の大きな魅力の一つといえるでしょう。

基幹産業を支える人材育成を目指して

今後の学校運営や人材育成について、大島先生は「後継者育成」を重要な使命として挙げます。

「那須拓陽高校は名前の通り、拓くという字が入っており、先人の方々が汗水流し、開いていただいたこの土地と開拓魂（フロンティアスピリッツ）を今に引き継ぎ、未来へバトンを渡せたらと考えております。2年生では授業の一環として約1週間のインターンシップを実施しています。学校だけでは学べない農



業の現場を体験してほしいという思いがあります。また、今後は農業経営についてもより深く学べる機会を設けていきたいと考えています。那須塩原市にある農業高校として、地域の基幹産業を支える人材を育成していきたいですね。地域の農家さんや卒業生の農家さんたちに多岐に及ぶ支援やご協力を頂いており大変感謝しております。」

また現在は耕種部門と畜産部門がそれぞれ独立したカリキュラムとなっていますが、将来的には耕畜連携を視野に入れた教育の充実も目指しているといえます。

「生徒たちは将来、大学や専門学校などでさらに専門的な学びを深めていくと思います。そのためにも、まずは拓陽高校でしっかりと基礎を身に付け、農業人として成長し

ていくための土台づくりをしてほしいと考えています。」

一方で、日々の実習においては「安全で楽しく学ぶこと」を何より大切にしているそうです。

「牛に接した経験のない生徒も多くいます。牛の世話を通じて、命の大切さや生き物と向き合う責任についても学んでほしいと思っています。」

畜産教育を通じて、技術だけでなく人としての成長も支えている様子がうかがえました。

酪農の未来を見据えたA2ミルクへの挑戦

大島先生と佐藤さんは、今後の酪農業界の発展には牛乳・乳製品の消費拡大が重要であると考えています。

那須拓陽高校には食品化学科があり、乃木農場で生産された生乳を活用して低温殺菌牛乳やチーズなどを製造・販売しています。生産から加工・販売までを学べる環境は、農産物に付加価値を生み出す視点を養う貴重な機会となっています。

さらに同校では、A2ミルクの生産にも取り組んでいます。A2ミルクは、βカゼインの遺伝的特徴に着目した牛乳で、乳製品の新たな付加

価値として注目されています。

同校では、A2ミルクを生産できる牛群の整備を進めながら、大学との連携のもと研究を継続しています。高校生の段階からこうした先進的な取り組みに触れられることも、同校ならではの特徴といえるでしょう。

取材を終えて

取材を通じて印象的だったのは、大島先生と佐藤さんのお二人から伝わってきた、牛や酪農に対する強い情熱でした。

牛部での活動、課題研究への挑戦、大学との共同研究など、那須拓陽高校には生徒一人ひとりが主体的に学び、成長できる環境が整っています。そしてその根底には、地域農業を支える人材を育成したいという確かな理念があります。

日本有数の酪農地域に根差しながら、未来の農業を担う人材育成に取り組む那須拓陽高校。その歩みは、これからの農業・酪農の発展を支える大きな力となることでしょう。

最後に、お忙しい中取材にご協力いただいた大島先生、佐藤さんに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



本会は、7月30日(木)TKPガーデンシティ PREMIUM京橋(東京都中央区京橋)において、第77年度通常総会を開催し、令和7年度の事業実績、剰余金処分案、令和8年度の事業計画案の承認を得るとともに、役員の新選を諮りました。

令和8年4月から稼働を開始した福島県浪江町のシャインコースト株式会社に於いて触れ、「10月には併設した酪農技術研究所も本稼働する。日本における酪農技術の拠点の1つ



▲ 限部会長

午後1時、定刻開始となった総会の冒頭、挨拶に立った限部洋代表理事会長は、会員並びに来賓各位の参集に対する謝意に続き、7月28日の熊本地震発生に際しいただいたお見舞いの言葉に謝意を示すとともに、酪農業関係の被災状況について言及しました。

そして国内の酪農情勢について、「中東情勢の不安定化や円安を背景に、配合飼料など生産資材の高値が続いている。一方、昨年8月までに飲用乳価が3回値上げされたことで、酪農経営には明るい兆しも見え始めている。ただし、依然として厳しい環境にある。」と説明しました。

としての責務を担うとともに、福島県酪協、全酪アカデミーとも連携しながら、次世代を担うリーダーの育成と労働力不足を解消するため、強力に推進していきたい」と意欲を示しました。

昨年設立したらくのう乳業株式会社に於いては、「6月11日の地鎮祭を経て、新工場建設に着手した。令和10年12月の稼働開始を目指す本工場は、全農、東北生乳販連、関東生乳販連、全酪連が初めて共同出資して取り組む東日本最大級の乳製品製造拠点となる。これにより長年の課題であった需給調整機能を抜本的に強化し、生産者の皆様が安心して生乳を生産し続けられる環境を系統一丸となつて構築する所存である。」と表明しました。

また、全酪アカデミーの事業について、「設立から令和7年度までに新たに4組が酪農家としてスタートした。その生き生きとした姿は周辺の酪農家にも刺激を与え、地域活性化の源となつていようである。さらに今年度、新たに3コースが新設され、新規研修生の受け入れ準備を進めている。就農後もしっかりとした酪農経営を続けられるよう支援を続け、今後

も賛助会員とともに酪農生産基盤維持に努めていく。」とし、さらに、7月に沖縄県で開催された全国酪農青年女性酪農発表大会について、「台風の影響により悪天候が予想される中、多くのご来賓、関係機関、全国の酪友が一堂に集い、語り合い、切磋琢磨し、親睦を深め合う大変貴重な2日間となった。全国の酪農家には、これからも本大会を通じて、酪友のつながりを大切にしていただき、気持ちを高め合ってほしいと切に願うところである。」と述べました。

昨年4月に新しく公表された酪肉近について「長命連産、国産飼料の利用拡大、牛乳乳製品の需要拡大に併せ、生産者や関係者が誇りを持ち、若い世代に魅力ある畜産業を実現するための方向性が示された。全酪連として、これらの方針に応えるため、会員組織強化や酪農関係団体との連携を深める所存である。」と方針を示しました。

また今年7月に韓国で感染が確認されたランピースキン病について「日本では今年7月より『家畜伝染病』へ格上げされ、ワクチン接種、殺処分、移動制限などが義務付けされた。今後感染を防止するため、酪農家を

始め関係者の皆様の日頃の防疫対策への継続した取り組みが重要な課題となる。」と述べました。

令和3年度に策定した全酪連将来ビジョンについては、「全酪連の基本姿勢として、『持続的な酪農生産基盤の構築』を掲げている。また全酪連が実現したい未来として、『消費者の食卓が牛乳や乳製品によって笑顔で満たされるように、酪農家の食卓もまた、笑顔で満たしたい』という思いを持ち、事業に取り組んでいる。この将来ビジョンに基づく具体策として、販売事業の強化、業務効率化を柱とした第十三次中期事業計画を策定し、事業を推進している。この計画を着実に実行し、現場の酪農家に寄り添う姿勢を明確にしつつ、我が国の酪農が直面する、様々な課題に対応していく所存である。また、全酪連が次の段階へステップアップすることを目指し、『NEXT STAGE全酪』を合言葉に、酪農家の皆様が前を向いて進めるよう励む所存である。」と決意を示しました。

次に、令和7年度の本会の事業実績について、経常利益で17億1,500万円、税引前当期利益で9億8,400万円となったことから、

出資配当を1.5%、事業分量配当を600円/トで諮ることとし、会員に対し深く謝意を示しました。

最後に、「会員及び酪農家の皆様には、日頃から多大なご理解とご支援をいただいていることに改めて深く感謝するとともに、引き続きご協力を賜りますようお願いしたい。」として開会の挨拶を締めくくりました。

本総会には来賓として、農林水産省畜産局・長井俊彦局長、農林中央金庫・爲井清文常務執行役員をはじめとして、一般社団法人全国酪農協会等関係団体からご臨席を賜りました。

農林水産省畜産局の長井局長は、出席者の酪農行政への協力、推進に対する謝意と共に、熊本地震での被災者に対しお見舞いの意を示された後、石油関連資材状況について、「中東情勢を背景とした価格上昇や調達に対する不安が続いている。政府として日本全体の供給量を確保するとともに、個々の事業者からの情報や相談を踏まえて流通上の問題を解消する取り組みを進める。」と説明されました。続いて酪農を巡る状況について「乳価改定が実現した一方、飲用向け需要の減少により脱脂粉乳在庫が毎年約2万ト積み上がっている。このよ



▲ 農林水産省 畜産局 長井局長

うな需給環境を受け、6月にJミルクが抛出金単価の引き上げを決定した。今後は、Jミルクが生産人口と需要出口の双方から対策を検討するが、本課題の根本的な解決に向け、業界を挙げた議論に国も積極的に参画する。」と方針を示されました。

需要期の生産基盤強化については、「冬場の余乳処理のみならず、夏場の安定供給も需給上の課題となっている。夏場の受精卵移植を推進するなど、暑熱対策の強化に関する事業を措置しているところである。今年もすでに気温が高くなっているが、今年の実績やノウハウを活用しながら取組みの強化を引き続き推進していく所存である。」と説明されました。

畜産クラスター事業について、「令和7年度から従来の『収益性向上タイプ』に加え、『持続性向上タイプ』を創設した。これにより中小規模の



▲ 農林中央金庫 爲井常務

家族経営を行っている酪農家からも要望があがっている。現在中央畜産会から、各地域の畜産クラスター協議会へ配分予定額の通知を行っている。引き続きこの事業を活用して生産基盤の強化を図っていく所存である。酪肉近でも記載しているが、自給飼料基盤に立脚した足腰の強い酪農経営をより一層推進したいと考えている。」と方針を示されました。

最後に、畜安法の改正について、「7月に自民党が『加工原料乳生産者補給金制度をクロスコンプライアンスの対象に加える方向で検討すべき』という提言を取りまとめた。農林水産省としては、今回の議論及び提言を十分に踏まえた上で対応すべく、引き続き生産者の声を聞きながら生乳需給の安定に向け取り得る具体的な施策を不断に行い、必要な措置を講じていく所存である。」と述べられ、挨拶を締めく

くりました。

次に、農林中央金庫の爲井常務執行役員は、来賓挨拶にて総会開催への祝意と共に、農林中央金庫の業務への理解・協力を謝意を示された後、日本経済が緩やかな回復基調であることに言及した上で、「物価上昇、人手不足、海外情勢の不透明感など、先行きを見通しにくい状況が続いている。酪農業界でも、生産資材価格の高止まりや飲用向け需要の低迷など、厳しい経営環境が続いている。日本の食と地域を支える酪農生産基盤を維持発展させていくためには、生産現場の課題に着実に対応していくことが重要である。御会においては、生乳乳製品の安定供給はもとより、生産者の経営安定や、肥料供給体制の強化など、持続可能な酪農生産基盤の構築に向けて、大きな役割を発揮されている。その取り組みは酪農業界のみならず、我が国の食料安保の観点からも極めて重要である。」と認識を示されました。

また、全農と全酪連が共同で事業を展開する「らくのう乳業株式会社」について、「酪農業界における記念すべき取り組みである」と評価した。最後に、「農林中央金庫としても、系統

金融機関として金融機能を発揮するとともに、関係団体の経営課題への対応や生産基盤の維持・発展を支援していく。」と述べられ、挨拶を締めくくられました。

その後、本川和幸氏（大分県酪農業協同組合 代表理事組合長）を議長に選出して議事に入り、いずれの議案も賛成多数で原案どおり承認されました。

本川議長は議案終了後の挨拶において、熊本地震の被災者へお見舞いの意を示すと共に、夏場の需要期生産の重要性について、繁殖のコントロールや乳房炎の低減により搾乳可能頭数を増やした大分県酪での取組みを交えて話されました。



▲ 本川議長

議事終了後、小前副会長理事が関係の挨拶に立ち、会員及び来賓に対し謝意を示した後、本川議長に対しても「滞りなく議事を進めていただき



▲ 小前副会長

き、感謝申し上げる。需要期生産についても参考になるお話をいただいた。」と謝意を伝え、「（需要期生産について）全酪連の指導のもと、皆さんに取り組んでいただきたいと思う。」と呼びかけました。また、脱脂粉乳の在庫対策及び食品の消費税減税といった、酪農を取り巻く環境についての課題に言及した上で、「全酪連には、全国の酪農組合の代表としてリーダーシップをとり、対策の実行及び情報提供といった役割を果たして欲しい」と述べました。最後に、地震や豪雨といった相次ぐ自然災害について、「災害への備えをしていくことが重要であり、BCPの実行性向上を徹底していただきたい。災害ともいえる連日の暑さに対しても、皆様にはご自愛いただきたい。」と締めくくり、第77年度通常総会は終了しました。

第53回

全国酪農青年女性酪農 発表大会

酪農意見・体験発表の部

先月号に引き続き、今月号では、7月9日(木)～10日(金)に沖縄県那覇市の「ロワジールホテル那覇」において開催いたしました「第53回全国酪農青年女性酪農発表大会」の、酪農意見・体験発表の部をご紹介します。



辻山弥生 審査委員長
(公財)日本乳業技術協会 専務理事

酪農意見・体験発表の部 審査講評

8月号で紹介した酪農経営発表の部に続き行われた酪農意見・体験発表の部は、各会議から選出された6名により行われ、①酪農との関わり②周囲とのつながり③活動の広がり④目標と夢の実現性、の4つの観点から慎重に審査が行われました。発表内容は、審査委員長による審査講評にてご紹介いたします。

酪農意見・体験発表の部

荒井芳幸さん(関東甲信越会議)が最優秀賞を受賞!!

発表者の皆様には忙しい日々を送る中、多くの時間を割いて発表に臨まれたこと、本当にご苦勞様でした。皆さんの貴重な経験や現状を見聞きさせていただき、本当に感謝申し上げます。

家族の絆

動き出した私たちの酪農経営

九州酪農青年女性会議 横山さとみさん



経営継承したばかりの兄の突然の死。酪農は素人のご主人と横山さん、そしてご両親で経営を継続するなか、「徹底した対話」「役割分担」「法人化」によって家族の絆と経営基盤を再構築した、家族酪農の再生モデルです。地元の東串良町でわずか4戸と

なった酪農の灯を守りつつ、一步步課題に向き合いながら「楽しい酪農」を体現しようとする姿勢は、全国の家族経営体に大きな勇気と希望を与えるものです。

甥御さんとの間で生じた数々の衝突は、毎日の作業計画や個人の考えを共有する「ミーティング」を仕組み化したことでお互いに妥協し着地点を認め、最も効果的な改革となりました。更に、法人化は経営の透明性を飛躍的に高めました。

お互いを尊重し合うことで「最高の笑顔」が戻ってきた横山家。持続可能な酪農のトップランナーとして、力強く歩み続けられることでしょう。

「行け！我が想いよ！イツシヨウタイム!!」
「貴方と一緒に♡」
「愛を届ける人にならなくて(*、*、*)」
西日本酪農青年女性会議 小川香奈さん



創業79年を迎えた池田牧場で、独自の福祉・教育的なバックグラウン



ドを融合させた素晴らしい「酪農教育ファーム活動」の歩みと、次世代への熱いメッセージを込めた極めて感動的なライフストーリーです。「牛乳が食卓に届くまでの物語」を自ら消費者へ発信し続ける姿は、これらの酪農業界全体に大きな希望と愛、そして確かな勇気を与えるものです。

児童福祉や心理学の学び、フランスの教育ファームで得た知見を生かし、教育ファームの1期生として現

在も活躍され、牧草作りから搾乳、自家製バターやチーズ作り、そして自分の手で搾った牛乳パックの持ち帰りまでを体験できる「ぶち誰でも酪農家になれる牧場」の構想は、まさに教育ファームの究極系です。

「この土地を守って酪農を始めた」と次世代に思ってもらえるような、憧れと魅力のシンボルとして輝き続けることを期待しています。

今日の一本が、 3年後の牧場を変える

北海道酪農青年女性会議 藤井季樹さん



「今日の一本が、3年後の牧場を変える」という明確なビジョンのもと、授精業務を単なる「作業」から「未来への戦略的投資」と再定義し、明確なビジョンのもとで牛群改良を成し遂げた軌跡は、次世代の酪農経営における不確実性を突破する強力な指針を示すものとして、高く評価されます。

課題に立脚した着実な改良ステップと、費用対効果を意識したスマートなゲノム活用は、極めて現実的でコストパフォーマンスの高い段階的アプローチであり、秀逸な戦略です。さらに、7年間の歳月をかけた確かな技術的成果と、ロボット搾乳へのシームレスな移行を進めた点は、反対もありながらもデータと結果をもつて信頼を勝ち取った何よりの証拠です。

SNSや地域活動を通じて、この素晴らしい牛群改良の価値と楽しさを日本中に広げていかれることを、心より応援しております。次回は、改良、改善の成果をぜひ経営発表の形で発表頂ければと思います。

『平田ロツン牛』

「循環型酪農の挑戦と
赤に込めた地元への情熱」

関東甲信越酪農青年女性会議 荒井芳幸さん



「地域との協働」「自給飼料への徹底したこだわり」「搾乳を終えた牛の

価値再定義」という、これからの日本農業・酪農が目指すべき持続可能なモデルを極めて高いレベルで具現化した傑出した取り組みと受け止めました。異業種を経て就農した荒井さんは、地域の仲間やパートナーとともに情熱を注ぎ、数々の困難を乗り越えて独自のブランドを確立していくプロセスは、多くの示唆を与えるものでした。

経産牛を地域資源に変える「平田ロツン牛」のブランド化の実現とトリトリオ（地域主義）の実践は、関係者との粘り強いコミュニケーションと「地域の食をと共に育てる協働」の姿勢で実現し、その実行力は地域産業の活性化における素晴らしい先進事例です。

国産飼料の活用など環境への配慮を消費者に分かりやすく「見える化する取組」を自発的に実践されている点は、社会的責任の観点からも高く評価できます。

ふるさと納税や道の駅等との連携ですでに地域を巻き込み、今後は、この素晴らしい「高根沢スタイル」の酪農がさらに全国へ波及し、国産飼料100%という次なる高みの目標を達成されることを心より期待しています。

私と酪農 出会い そしてこれから

中部酪農青年女性会議 村岡悦史さん



豊富な農業・事務経験を生かし、現場主義を貫きながら、先進技術と人の調和を追求した次世代酪農モデルといえます。

39歳から始めた人工授精では、2年間で1,000頭を経験し技術を磨き上げ、指導役を務めるまでに技術を昇華させました。

また、完全ロボット搾乳化を進める一方、24時間のトラブル対応などにも取り組み、持続可能なスマート農業体制を構築した現実的かつ重要なマネージメント判断をしています。約30名の職場で高齢者や短時間勤務者も積極的に受け入れ、お互いのよい関係を構築し、さらに、暑熱対策やゲノム検査にもいち早く取り組み、これからの厳しい環境変化に

適応して生き抜く酪農経営の道標となるものです。

新しい時代の幕開けを象徴する赤と黄色の牛舎は、まさに地域と酪農の明るい未来を照らすランドマークとなり、持続可能で希望に満ちた酪農のトップランナーとして邁進されることを応援しています。

21歳の私

東北酪農青年女性会議 山中涼穂さん



好奇心を翼に世界を駆け巡る、次世代の酪農女子が示す「わがままで輝かしい未来！」という印象を受けました。

21歳という若さで、「圧倒的な行動力」「世界基準の酪農技術への探究心」「実家の継承に向けた明確なビジョン」を力強く描いた、エネルギーで感動的なライフストーリーです。「酪農という仕事は楽し

い、かつこいい」という姿を見せてくれたご両親への感謝の気持ちを感じ取れ、コロナ禍の逆境にも屈せず、北海道、カナダへと単身飛び込んだ行動力は、次代を担うリーダーの誕生を感じました。

海外での経験を姉弟での牧場経営に生かそうとする姿からも、牧場の未来へ大きな期待が持てます。

「自分の人生もつとわがままに！」という言葉には、酪農女子としての楽しさも全力で満喫する姿勢を大切にしながら主体的に酪農を愛する、新しい世代の生き方を感じました。日本の酪農を「憧れの職業」へと押し上げてくれることを、大いに期待します。

審査基準に基づき審査をしました
が、最優秀賞の一人を選ばなければならぬ中で、選に漏れた方々が決して劣っているということではないことを申し上げておきます。皆さまの発表は非常に強いメッセージとして会場の皆様に届いたかと思えます。

結果、審査委員の合意で、関東甲信越会議代表の荒井芳幸さんを最優

秀といたしました。地域の関係者との協調やネットワークづくりに審査委員一同、非常に高く評価しました。今大会の発表者の皆様には、今後このような素晴らしい取り組みを発信していただき、また、いろいろなアプローチがあるのではないかと
いう可能性を体験させていただいたことに非常に感激しています。

懇親会では、北海道内の市町村や特産品をテーマにした楽曲を制作し、道内の多くのメディアで活躍中の『HAMBURGER BOYS』から、酪農家への応援メッセージをいただきました！



発表動画は、
YouTubeで
ご覧になれます。



日本酪農 見えて来紀

No. 399

松尾牧場

大分県日田市

つながりを大切にする 家族経営



▲ 将吾さん(次男)、林太郎さん(長男)、龍児さん(牧場主)

地域の紹介

松尾牧場がある日田市は、大分県西部に位置し、福岡県と熊本県に接する北部九州の交通の要衝として発展してきました。江戸時代には



▲ 豆田町の歴史的町並み

幕府直轄地「天領」として栄え、現在も豆田町をはじめとした歴史的な町並みが残り、古き良き文化が受け継がれています。周囲を九重連山や英彦山系の山々に囲まれた日田盆地は、豊かな水と緑に囲まれ、寒暖差の大きい気候が特徴です。こうした自然環境は農業や畜産を育み、市内各地では地域の特色を生かした営みが続いています。その日田市において、地域のTMRセンターを活用しながら、家族一丸となって酪農経営を営む松尾牧場があります。

牧場の概要・沿革

今回、訪問した松尾牧場は、大分県酪農農業協同組合（本川和幸代表理事組合長）の組合員です。大分県酪農農業協同組合の出荷戸数は59戸（令和8年3月末現在）、令和7年度の生乳受託乳量は65,297tとなっています。



大分県日田市



▲ 作業を行う龍児さんと林太郎さん

昭和51年に征丸さん（父）と京子さん（母）が約2頭の牛から酪農を開始したことで松尾牧場が始まりました。牧場主である龍児さん（50歳）は2代目であり、高校卒業後に大分県立農業大学校へ行き、その後北海道で2年の牧場実習を得て平成11年に就農されました。

松尾牧場は、龍児さん、直子さん（龍児さんの奥様）、征丸さん（父）、京子さん（母）、林太郎さん（息子23歳）の合計5名で毎日作業を行っ



▲ 毛刈りを行う林太郎さん

ています。繁殖管理は龍児さんと林太郎さんの2人が担当し、腹いっぱいエサを食わせて繁殖を回し、牛を健康に飼うことを第一に意識して日々の作業を行っています。

家族で取り組む共進会

長男の林太郎さんは高校時代は家業を継ぐつもりはなく、工業高校に

通っていました。しかし、先生から「長男なのだから継いでみたらどうか」と声をかけられたことをきっかけに、北海道の八紘学園へ入学します。八紘学園では共進会に情熱を注ぐ先生と出会い、熱心に取り組む同級生や先輩たちの姿に刺激を受けました。そうした環境の中で過ごすうちに、少しずつ共進会への興味を深めていったといいます。また、北海道更別村の今村牧場へ共進会の手伝いに行った際には、同牧場の牛が入賞する姿を目の当たりにしました。

「こんな牛がいるんだ」と感動したことが、さらに共進会への関心を高めるきっかけとなりました。その後、今村牧場で共進会の手伝いを続け、八紘学園2年生の夏には実習を希望。快く受け入れていただき、以後2年間にわたって今村牧場で学びを深めました。

また、牛好きなのは林太郎さんだけではありません。長女の百香さんは現在、北海道の牧場で実習中ですが、北海道で開催される共進会への参加はもちろん、松尾牧場の牛が出品する共進会の際には帰省し、参加されています。さらに、現在高校2年生の次男・将吾さんも共進会には



▲ 第16回全日本ホルスタイン共進会で今村牧場の牛を引く林太郎さん

欠かさず参加しており、家族みんなで共進会に親しんでいます。

このように家族一丸となつて共進会に取り組む中で、第36回熊本県乳牛改良同志会ベビィショウでは今村牧場から導入し松尾牧場で管理していた牛がグランドチャンピオンを獲得しました。しかし、その時のことを振り返ると林太郎さんは「今村牧場がすごいのと運が良かっただけです」と話してくださいました。大きな成果を収めても驕ることなく、

謙虚に牛づくりに向き合う姿が印象的でした。

仲間が広げる牛づくりの輪

共進会の魅力について龍児さんと林太郎さんに尋ねると、お二人とも「仲間の存在」と同じ答えが返ってきました。

共進会に携わる牛好きな人たちはオープンな方が多く、餌や繁殖など飼養管理全般について、さまざまな情



▲ 第22回オール九州B & Wショウで牛を引っ張る将吾さん(左)と百香さん(右)

報を気軽に教え合う関係があるそうです。分からないことがあれば多くの仲間に相談し、それぞれの考え方や理論を聞きながら、自分たちの牧場に合うものを取り入れていると話してくださいました。また、多くの仲間と交流することで牛づくりに関する「引き出し」が増え、さまざまな場面での対応力にもつながっているそうです。

また、龍児さんは共進会だけでなく、九州連合乳用種経産牛枝肉共励会にも10年ほど前から参加しています。参加理由について「単価が良いし、3月は季節別乳価が一番低い時期だから、その時期にお小遣いが入ると嬉しい」と笑顔で話してくださいました。さまざまなイベントへ積極的に参加する姿からは、人とのつながりを大切にする龍児さんらしい社交的で親しみやすい人柄が感じられました。

そのため共進会でも仲間からも慕われるムードメーカー的な存在です。取材中も笑顔で場を和ませてくださり、多くの仲間に囲まれている理由がうかがえました。

繁殖管理とTMR

龍児さんと林太郎さんが日々の作業の中で特に気を配って取り組んで



▲ 北海道実習中の百香さん

いるのが繁殖管理です。これは林太郎さんが実習先の今村牧場で特に印象に残ったことの一つが、繁殖に徹底していた点だったといいます。毎日牛の状態を細かく確認し、少しでもいつもと違う様子がないか、目を光らせています。CIDERやPG製剤の活用なども取り入れ受胎率の向上を図っています。

また、牛に腹いっぱい良質なエサを食べさせ、健康的な牛群づくりをサポートしている背景には、地域のTMRセンターである「南大分県酪



▲ 北海道で牛を引く百香さん

農振興公社 混合飼料供給センター」の存在があります。平成11年、混合飼料供給センターの設立を機に発酵TMRの利用を開始しました。それまで給与していたビール粕の入手が難しくなったことに加え、周囲の酪農家がミキサーを導入し乳量を伸ばしていたことも、利用を後押ししたといいます。現在は「エスプラス」という銘柄を利用しており、しっかりと梱包された状態で届けられるため品質が安定しており、年間を通じて安心して給与できる点を高く評価



牛が安定して良質な飼料を食べられる環境が整っていることが、松尾牧場の繁殖成績や牛づくりを支える大きな力となっています。



▲(有)大分県酪農振興公社 混合飼料供給センター

しています。TMRの利用を始めてからは牛の状態が良くなり、乳量の向上にもつながりました。また、週1回の配送で対応しており、自前でミキサーやトラクターを導入する必要がなく、原料や資材を保管する場所も必要ないため、設備投資や管理面での負担軽減にも大きく貢献しています。

家族と酪農への思い

最後に龍児さんに、家族や酪農への思いについて伺いました。

林太郎さん、百香さん、将吾さんの3兄弟に向けて「継いでほしいと言ったことは一度もない」と龍児さん。「自分のしたいことを見つけて、後悔のないように生きてほしい。(林太郎さんと百香さんが)北海道へ行くとき聞いた時は、うれしさと不安半々。でも、酪農の楽しさも厳しさも、いろんなことを見て経験してき



▲ 発酵TMR「エスプラス」と全酪連配合



▲ 育成牛舎と自給ロール

てほしい」という思いだったそうです。また、後継者として牧場を支える林太郎さんには、「自分は後悔していることもたくさんある。でも好きで酪農をしているから仕方ない。」と、「ただ牛乳を搾るだけじゃなくて、いろんなことに挑戦する酪農家になってほしい。期待している。」とエールを送りました。

今後どのような牧場にしていきたいかを尋ねると、「雇用は怪我とかに神経を使う。家族で仲良く怪我なく健康に安全に協力し合える牧場になり

たい。10年後、もし苦しくても笑って頑張れる牧場になりたい。」と。

さらに酪農への思いについては、「酪農をやめるのは簡単、でもまた始めるのはすごく大変。自分たちは使命を持って搾っている。」と話します。一方で、「もう少し乳価が上がってくれると助かるんだけどね」という率直な思いも。消費者の皆様に向けては「牛乳を一杯でも多く飲んでももらえたらうれしい。店頭価格が上がることもあるが、その背景には酪農家の苦労がある。ぜひ理解してもらいながら、これからも牛乳を飲んで応援してもらえたらありがたい。」と語ってくれました。

最後に

暑さ厳しい中、取材に快くご協力いただき、誠にありがとうございました。家族や仲間への感謝を忘れず、人とのつながりを大切にしながら酪農に向き合う松尾牧場。その姿勢は、共進会や日々の牛づくり、そして地域との関わりの中にも表れているように感じました。これからご家族や地域の仲間とともに歩む松尾牧場のさらなる活躍を楽しみにしています。(S・M & N・A)



自民党畜酪委員会

クロコンに加工補給金等追加を提言 規律強化で生産者間の不公平感解消へ

自民党畜産・酪農対策委員会（築和生委員長）は7月15日、「生乳の需給と価格の安定を図るための施策の強化に向けた提言」を取りまとめた。生乳需給安定クロスコンプライアンス（主要な酪農関係の補助金等の交付を受ける場合に、全国的な生乳需給安定のための取り組みに対して拠出していること等を要件とする措置）の対象に加工原料乳生産者補給金等の追加及び、一部の生産者による指定団体への少量複数出荷に対する規律強化について、早期に進めていくことを確認した。翌16日には、鈴木憲和農相へ提言を渡した。

冒頭、築委員長は「平成29年の畜

安法改正以来、（系統外の生産者の一部には）場当たり的な指定団体の利用や、脱粉在庫対策への不参加

がみられ、こうしたことについて生乳需給の安定という点から、生産現場から『不公平だ』との声を多々いただいていた。こうした畜安法の問題に関して、検討を進めることを昨年12月に決議として明記した」と経過を説明。それに基づき党内で議論を重ね、提言案として取りまとめたことを報告した。

その上で

築委員長は、補給金等をクロスコン



▲ 築委員長

プライアンスの対象事業に追加するには、畜安法においても改正が必要な部分があること、少量複数出荷に対する実効性のある規律を作るべく、進めていくことを説明。「この2点に主眼を置き、皆様方にお諮りして取り組みを進めていければと考えている」と述べ、活発な議論を求めた。会合では、築委員長が提言案の内容を説明した後、議員からの意見を聞き、その方向性について了承を得た。

会合後、報道陣の取材に応じた築委員長は「提言で示した2点の対応については皆さん賛成で、『どんどん進めてほしい』と、早期に進めていくことについて了解を得た。このうちクロスコンプライアンス対象事業への補給金の追加に関しては、令和9年度から対象にしていき

たいと考えているので、間に合うよう、なるべく早く法律の改正を進めていきたい」との考えを示した。（7月20日号）



▲ 16日夕方、鈴木農相へ提言を渡した

日本家畜人工授精師協会調べ

F1交配率45%超、高水準続く 性選別精液利用は過去最高26%

日本家畜人工授精師協会（AIAJ）はこのほど、令和8年1～3月期（第1四半期）における乳用牛への黒毛和種の交配状況（F1交配率、速報

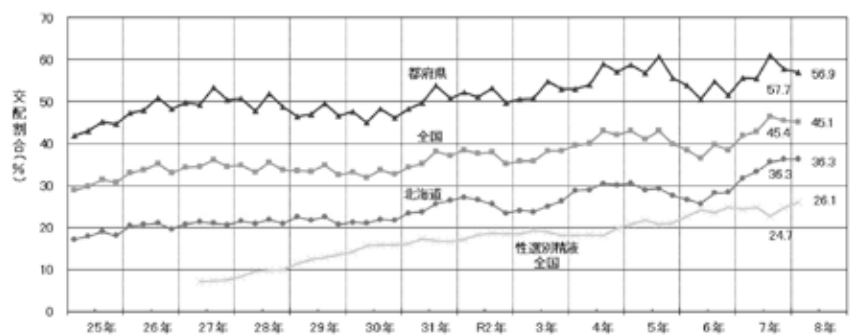
値）を公表した【図】。全国のF1交配率は45・1%で前期比0・3%低下、前年同期比3・1%上昇。過去最高値だった令和7年7～9月期よりは

下回っているものの、前期に続きF1交配率は高い水準で推移している。他方で、全国における性選別精液の割合は26・1%（前期比1・4%上昇、前年同期比1・8%上昇）。上昇傾向で推移していた性選別精液の利用率は、令和7年7～9月期に一時低下したが、前期には上昇に転じ、今期は再び最高値を更新した。

F1交配率のうち、北海道は36・3%（前期比同、前年同期比4・5%上昇）。前期と同様、ここ数年間で最も高い状態が続いている。

都府県は56・9%（前期比0・8%低下、前年同期比1・3%上昇）。直近で最も高かった令和7年7～9月期と比べるとやや下回っているものの、F1交配率は北海道と比較すると依然高い。（7月20日号）

乳用牛への黒毛和種精液及び性選別精液の交配状況



農水省飼料課

粗飼料利用、9割が維持・増加検討 WCS用イネは耕種農家が7割生産

農水省飼料課はこのほど、水田を活用した飼料用米、WCS用イネ、飼料作物（牧草、青刈りトウモロコシ）の生産・利用の意向等に関するアンケートを実施。国産粗飼料を利

用している畜産農家を対象にした調査では、「現状程度利用を続ける」または「現状より利用量を増やす」との回答が9割を占めた。一方、作物を生産する側の調査では、WCS

用イネを生産しているのは7割、牧草は3割、青刈りトウモロコシは4割が耕種農家側だった。

アンケートは令和9年度からの水田政策見直しに向けて実施したもので、イネWCS等を利用する畜産農家1611戸、水活交付金を利用して生産する耕種農家と畜産農家合計3074戸、地域再生協議会809戸が回答した。

畜産農家の回答のうち、飼料用米の利用継続意向について乳用牛を飼養する生産者を見ると、「代替飼料より安価である限りは利用を続ける」が35%と最も多く、「代替飼料と同程度の価格であれば利用を続ける」「現在よりも少しでも価格が上がった場合は利用をやめる」がともに19%だった。

また、乳用牛の生産者における国産粗飼料の利用状況を見ると、イネWCSは56%、牧草は73%、青刈りトウモロコシは36%が「利用している」と回答したが、ソルゴーは9割が「利用していない」と答えた。

飼料課は「生産現場の声を参考に令和9年度以降の新たな水田政策の見直しに向けて検討を進めたい」としている。（8月1・10日 夏季合併号）

謹んで令和8年熊本地震のお見舞い申し上げます

被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。一日も早く復旧されますことを心からお祈り申し上げます。

一般社団法人全国酪農協会

全酪新報

- 人が牛乳を必要とし、牛肉を必要とし、緑を必要とする限り、酪農は誇り高い永久の仕事です。
- 明日へ向かって前進する酪農界の動きを全酪新報は正確に報道します。時に怒りの声を、時に喜びの声を…幅広くお伝えします。
- ご家族で愛読いただける酪農専門紙です。
- 毎月1日、10日、20日発行、年間購読料は6,600円（税込・送料込）です。
- お支払（請求書到着後）は、郵便振替、銀行振込、クレジットカード決済がご利用いただけます。
- 見本紙ご希望の方は申し出下さい。無料です。（見本紙にバックナンバーは含まれません）

全酪新報/
購読お申込
フォーム



一般社団法人 全国酪農協会

電話 03 (3370) 7213
www.rakunou.org



総務部
発

全国酪農青年女性会議「令和8年度総会」開催

第53回全国酪農青年女性酪農発表大会が行われた前日の令和8年7月8日、全国酪農青年女性会議の総会が、ロワジールホテル那覇（沖縄県）にて開催され、上程された各議案はすべて可決、承認されました。

また、今年度は役員改選の年であり、構成される各地域会議の委員長が新たな全国酪青女の役員として選任され、全国酪青女委員長には東北酪農青年女性会議の斎藤忠義委員長が役員の互選により決定しました。

斎藤新委員長は、全国酪農青年女性酪農発表大会の席で、『酪農発表大会、理解醸成活動をはじめとした酪青女活動は大変意義がある活動だと思っている。色々な所に出向き、交流し、技術、知識を獲得しながら経験を積むことで、自身の酪農経営と暮らしを豊かにしていくものだと思っている。この大会のように「参加して楽しかった。交流をはかてよかった」といういただける新しい酪青女作りをこの新しいメンバーで進めていきたい。』と抱負を述べていました。（M.I）

●全国酪農青年女性会議 新体制(役員)(任期:2028年の総会終了まで)

委員長	斎藤 忠義	東北酪農青年女性会議	(福島県)
副委員長	遠藤 裕子	北海道酪農青年女性会議	(士幌町)
//	山下 大介	西日本酪農青年女性会議	(鳥取県)
//	北谷 記啓	中部酪農青年女性会議	(愛知県)
監 事	阿部雄太郎	関東甲信越酪農青年女性会議	(新潟県)
//	志賀 拓馬	九州酪農青年女性会議	(大分県)
顧 問	中村 俊介	九州酪農青年女性会議	(熊本県)



▲ 斎藤委員長

全酪アカデミー
発

鹿児島県酪農業協同組合 「令和8年度酪農後継者キッズ交流会」開催

令和8年7月28日(火)～29日(水)、鹿児島県酪農業協同組合（有村洋平代表理事組合長）主催による「酪農後継者キッズ交流会」が開催され、県内全域から12名の小中学生が参加しました。本交流会は、県内の酪農家の子どもたちが多様な体験や交流を通じて、将来にわたる仲間づくりを図るために開催されています。

初日は『いおワールドかごしま水族館（鹿児島市）』を視察しました。生き物を管理するという共通点から、水の生き物の生態を学び、酪農を多角的に捉えるきっかけとする狙いがあります。同館では、海や川の保全活動、海洋プラスチックごみ削減、展示・教育を通じたSDGs意識の向上など、持続可能な社会づくりを進める活動を行っています。

イルカショーの見学や、普段は入れないバックヤードツアーでは、水槽の仕組みや魚の管理方法について学ぶことができ、子どもたちは熱心に説明に耳を傾けていました。

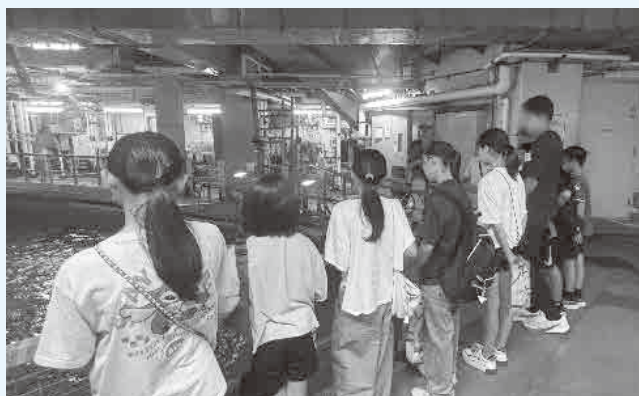
翌日は『セイカ食品株式会社日置アイスクリーム

工場（日置市）』を訪問しました。同社はボンタンアメや南国白くまアイスで広く知られています。工場では多くのスタッフがさまざまな種類のアイスを製造していました。工場見学後、3種類のアイスの試食とお土産をいただき、子どもたちも大変喜んでいました。

昼食後は『かごしま環境未来館（鹿児島市）』にて環境問題について学び、次世代の酪農に向けた取り組みを考える機会となりました。

前年参加の子も初参加の子も次第に打ち解け、帰る頃にはすっかり仲良くなっていました。子どもたちにとって、ひと夏の貴重な思い出になったことと思います。

全酪アカデミー事務局が交流会に参加するようになってから今回で4回目になります。参加した子どもたち、そしてその次の世代へと、酪農業界の未来を支える一助となるよう、引き続き“新規就農の取り組み”を進めてまいります。
(Y.W)



▲ 水族館の裏側に潜入



▲ 夜は花火で交流



▲ セイカ食品(株)さんにて



▲ 未来館での環境学習

名古屋
支所発中部国際空港の「動物検疫所広報キャンペーン」に参加
—愛知・岐阜・三重の各県酪農農業協同組合と全酪連の職員ら—

8月4日、中部国際空港（愛知県常滑市）で動物検疫所による夏休み広報キャンペーンが実施されました。動物検疫所中部空港支所からのキャンペーンの参加要請を受け全酪連、愛知県酪農農業協同組合、岐阜県酪農農業協同組合連合会、三重県酪農農業協同組合が参加しました。

さらに、東海3県の家畜保健衛生所や家畜防疫担当部局、名古屋植物防疫所中部空港支所の職員らも加わり、総勢21名で広報活動を行いました。

中部国際空港アクセスプラザで「STOP! 日本への肉製品は持込禁止」と日本語、英語、中国語、韓国語で記載したチラシ入りポケットティッシュ約1,100個を空港利用者へ配布し、海外からの肉製品の持込み禁止について啓発を行いました。

夏休み期間中であつたことから家族連れの利用者が多く見られたほか、外国の方の旅行者も多く、特にアジア地域からの利用者が目立ちました。

広報活動終了後には、通常は立ち入ることのできない検疫現場を見学する機会をいただき水際対策の一

端を垣間見ることができました。

厚生労働省検疫所ブースの前には、海外から家畜伝染病等を侵入させないため、靴底消毒用マットの設置や、注意喚起ポスターの提示など、水際対策が徹底されていました。また、動植物検疫探知犬とハンドラーの紹介を受けたほか、携帯品検査の結果、輸入が認められなかった様々な肉製品について説明を受けました。

一見すると持込みが可能と思われる食品も規制の対象となることが紹介され、参加者は動物検疫の重要性について理解を深めました。

見学後に行われた意見交換会では、令和8年7月1日から、家畜防疫官による輸入検査を受けずに不正に持ち込まれた肉や肉製品の日本国内での販売等に対する規制が講じられたことを踏まえ、警察から県畜産担当部局に寄せられた問合せ事例が紹介されました。

また、関係機関による立入検査の実務対応などについて質疑応答が行われ、関係者での認識の共有など活発な意見交換が行われました。（N.S）



▲ キャラクターと一緒に集合写真



▲ 意見交換会



▲ 日本語、英語、中国語、韓国語で書かれた「STOP! 日本への肉製品は持込禁止」のチラシ入りポケットティッシュ配布の様子



日本語、英語、中国語、韓国語で書かれた「STOP! 日本への肉製品は持込禁止」のチラシ

大 阪
支所発

水際対策で家畜伝染病予防を！ 関西国際空港にて「動物検疫広報キャンペーン」を 関係団体合同で実施

- ①実 施 日：令和 8 年 7 月 29 日(水)
- ②実施場所：関西国際空港 南海電鉄・JR 西日本駅前
- ③参 加 者：動物検疫所関西空港支所、
大阪府家畜保健衛生所、全酪連大阪支所
- ④実施内容：関西空港駅（南海電鉄・JR 西日本）
改札口前において

「肉製品の持ち込み禁止」などの広報用ポケットティッシュを動物検疫所公式キャラクターの「クンくん」とともに観光客に手渡し啓発活動を行った。活動後に動物検疫所の概要説明・空港内視察(動

植物検疫探知犬等)を行った。

- ⑤当日の様子：

海外からの肉製品等持込禁止を表記したポケットティッシュを配布しながら肉製品の持ち込みは禁止されていると呼びかけました。その後は動物検疫所の役割及び業務概要・関西空港支所の業務概要説明して頂き、税関検査場等での業務見学（携帯品検査・動植物検疫探知犬・靴底消毒）を実施しました。広報キャンペーンを行うことで旅行者に周知して貰う大切な活動だと痛感致しました。(A.O)



大 阪
支所発

「令和7年度中国地区良質生乳出荷者表彰式」開催

中国生乳販売農業協同組合連合会は8月5日(水)、ひるぜんジャージーランド(岡山県真庭市蒜山)にて令和7年度中国地区良質生乳出荷者表彰式を実施しました。

檜尾代表理事会長からの挨拶では良質生乳の出荷継続は「当たり前のことを当たり前にする」ということであり、それがいかに困難かを強調しました。近年の

酷暑が飼養管理を一層困難にしていると言及し、夏場の生乳逼迫状況において、良質乳の搾乳が乳量増加に直結するとし、10月初旬まで暑さが続く見込みであり、牛の体調管理と良質乳出荷の継続を呼びかけました。

表彰授与として部門ごとに最優秀賞(6名)、優秀賞(5名)受賞者に賞状と記念パネルを授与しました。
(A.O)

●令和7年度中国地区良質生乳出荷者表彰 表彰者一覧

部	部 門	順位	組合名	農家名	表彰区分
1部	ホルスタイン部門(年間乳量:250t未満)	1	おかやま酪農協	早川 洋平	最優秀賞
		2	広島県酪農協	井上 正芳	優 秀 賞
2部	ホルスタイン部門(年間乳量:250t～500t未満)	1	おかやま酪農協	三宅 安史	最優秀賞
		2	大山乳業農協	遠藤 京介	優 秀 賞
3部	ホルスタイン部門(年間乳量500t～1,000t未満)	1	広島県酪農協	(株)溝上牧場	最優秀賞
		2	大山乳業農協	高間 理拓	優 秀 賞
4部	ホルスタイン部門(年間乳量1,000t以上)	1	大山乳業農協	福田 寛	最優秀賞
		2	大山乳業農協	(株)ナカムラファーム	優 秀 賞
5部	ジャージー部門	1	おかやま酪農協	樋口 貴明	最優秀賞
		2	おかやま酪農協	丸山 昭博	優 秀 賞
6部	高校・大学校部門	1	大山乳業農協	鳥取県立倉吉農業高等学校	最優秀賞



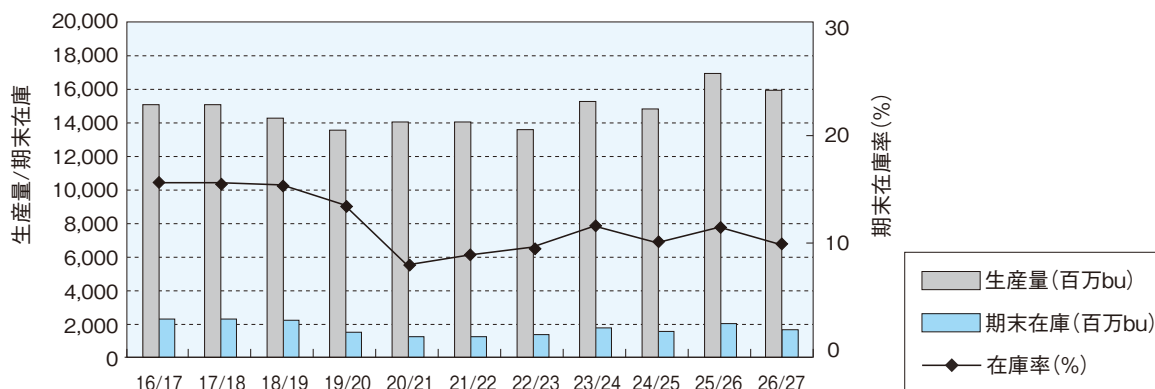


原料情勢

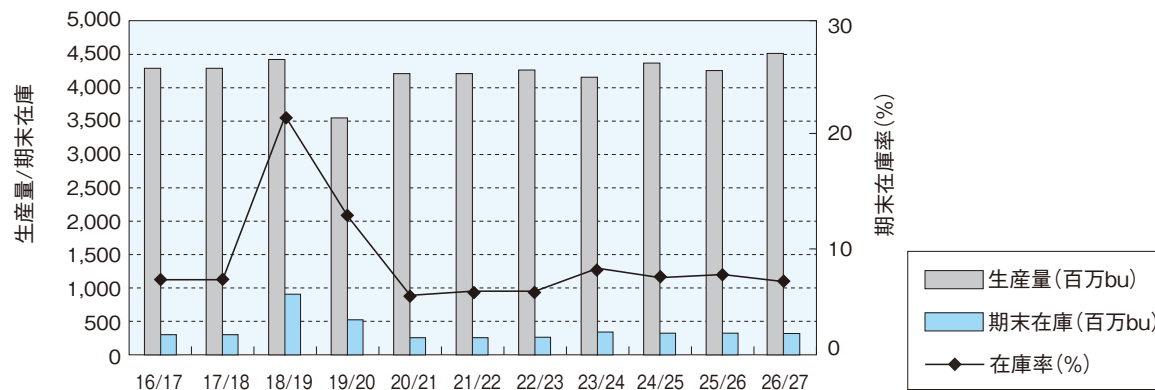
令和8年8月

8月12日発表 米国農務省 トウモロコシ 需給予想		25/26年産	26/27年産
	作付面積(百万エーカー)	98.8	96.7
	単 収(ブッシェル/エーカー)	186.5	180.7
	生 産 量(ブッシェル)	186億	179億8,300万
	需 要 量(ブッシェル)	166億5,500万	163億3,000万
	期末在庫(ブッシェル)	19億4,500万	16億5,300万
	在 庫 率	11.68%	10.12%
トウモロコシ 相場動向	8月USDA需給報告の25/26年産は、供給量は据置となった一方、輸出需要の増加により期末在庫は前月から減少した。26/27年産は作付面積の上方修正と単収の下方修正がほぼ相殺され、生産高は前月比で微増にとどまった一方、期初在庫の減少に加え、輸出見通しが上方修正されたことで、期末在庫は大幅に引き下げられた。世界需給は概ね安定する一方、米国では輸出増加等を背景に期末在庫が減少し、需給は引き締まる内容となった。米国産地では足元の降雨により土壌水分の改善が期待されるものの、8月後半にかけて高温・降雨不足が予想される地域もあり、単収のさらなる下振れリスクが残る。今後は米国の天候・単収動向が相場の焦点となる見通し。		
大豆粕 相場動向	8月USDA需給報告の25/26年産は、供給量は据置となった一方、圧搾需要の増加により期末在庫は前月から減少した。26/27年産は、単収の下方修正を上回る作付面積の増加により生産高が上方修正され、期末在庫も増加した。米国で大豆の作付面積が上方修正されたことで生産高見通しが増加し、期末在庫も市場予想を上回るなど、需給面ではやや弱気な内容となった。一方、圧搾需要は堅調で、大豆粕・大豆油の需要拡大を背景に米国の2026/27年度圧搾量は上方修正されている。大豆粕は、輸入品では需要増加を背景に上昇基調で推移しているほか、国産品についても原料大豆価格の高騰を受け、前期比で大幅な値上がりとなっている。		
槽糠類	【一般フスマ】 小麦粉の輸出停滞に伴うふすま発生量の減少に加え、歩留まりも低下していることから、需給は引き締まっている。当面は供給不足が続く見込みであり、受渡についても厳しい状況が続くと見込まれる。		
	【グルテンフィード】 輸入品も一定量入船しており、国産在庫も潤沢であることから、直近の受渡に大きな支障はない見込みである。今後の配合割合の動向には注視が必要であるものの、足元の在庫水準を踏まえると、当面は安定した供給が継続すると見込まれる。一方、九州地方については、熊本地震の影響による物流面への影響が懸念されるため、今後の状況には注意が必要である。		
海上運賃	7月後半から海上運賃は反発し、その後も強含みで推移している。ホルムズ海峡の通航量は徐々に回復しているものの、中東情勢を巡る不透明感は依然として強く、原油価格やバンカー価格も不安定な動きとなっている。また、パナマックス市場では中国向け石炭輸送や大豆を中心とした穀物輸送への需要が底堅く、船腹需給の引き締まりを背景に備船料も堅調に推移している。足元では台風による船腹の稼働減少も重なり、海上運賃は高止まりしており、当面は地政学情勢と船腹需給の動向が注目される。		
外国為替相場	米国の堅調な経済指標や日米金利差を背景に円安基調で推移し、一時164円の円安水準となった。一方で、日米協調による為替介入実施を受けて円高方向へ調整する場面もみられ、急激な円安進行への警戒感が強まった。足元では、日米金融政策の動向や追加介入への警戒感から、円安水準ながらも神経質な値動きが続いている。		

米国産トウモロコシ生産量と期末在庫の推移



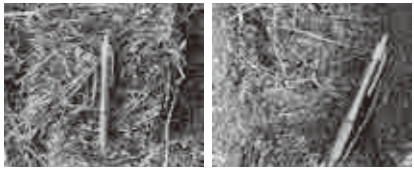
米国産大豆生産量と期末在庫の推移





輸入粗飼料の情勢

令和 8 年 8 月

海運情勢	26年8月現在の海上コンテナ輸送情勢について、足元では世界的なコンテナ輸送需要が堅調に推移する一方、地政学的なリスクや燃料価格、港湾混雑等の影響により、輸送環境は依然として不安定な状況が続いています。海上運賃については、26年夏場に入り一時的に落ち着きを見せたものの、アジア発北米向けを中心に再び上昇する動きが見られます。特に米国向け航路では、関税政策等を背景とした輸入貨物の前倒し輸送により、コンテナ需要が早い時期から高まったことが運賃を押し上げる要因となっています。釜山港など主要な積替港では、貨物集中や船舶スケジュールの乱れ等により、コンテナの滞留や接続船への積替え遅延が発生するケースがあります。このため、海上運賃だけでなく、実際の輸送日数や入港スケジュールについても注意が必要です。また、中東情勢については引き続き不透明感があり、原油・船舶燃料価格の上昇や、航路変更、保険料等への影響が懸念されています。こうした要因が発生した場合、海上運賃に加えて燃料サーチャージ等の追加費用が上昇する可能性があります。今後については、米国向け貨物の前倒し輸送が一巡すれば、秋口以降にコンテナ需要が落ち着き、運賃が軟化する可能性があります。一方で、地政学的リスクや燃料価格、港湾混雑等の影響が継続した場合には、運賃が高止まりする可能性もあり、先行きは不透明な状況です。輸入粗飼料については、海上運賃だけでなく、産地価格、為替、内陸輸送費、港湾費用、燃料サーチャージ等を含めた総合的な輸入コストを注視する必要があります。また、輸送遅延が発生した場合に備え、通常より余裕を持った納期設定や在庫管理を行うことも重要となります。今後も、米国をはじめとする主要産地の出荷状況、主要港の混雑状況、海上運賃、為替、燃料価格等の動向を継続的に確認し、安定した供給に努めてまいります。
米国産 ビートパルプ	米国26年産ビート大根（甜菜）は作付けが終了し、順調に生育しています。作付面積は25年産に比べて減少しています。ビートパルプペレットの生産は秋以降になります。25年産は売切状態であることから、国内向け、ヨーロッパ向けともに、早くも成約が進んでいる模様です。牧草や副産物の価格も上昇しているため、26年産ビートパルプペレットの価格も既に高騰しており、価格は24年産よりも値上がりした25年産よりもさらに値上がりすることが早くも見込まれています。
アルファルファ	米国産アルファルファは、各産地で収穫が順調に進む一方、干ばつによる供給懸念や国内外からの需要増加を背景に、産地価格は高値圏で推移しています。ワシントン州では、アルファルファの2番刈りが概ね終了または終盤を迎えており、まもなく3番刈りが始まる見込みです。2番刈りの品質は概ね良好ですが、国内需要に加えて輸出需要も堅調であることから、2番刈りは1番刈りを上回る価格水準で取引が開始されています。特にワシントン州では、隣接するアイダホ州で干ばつが深刻化しており、供給不足を補うため、ワシントン州産アルファルファがアイダホ州へ流入する動きが活発となっています。こうした域内需要の増加が、産地相場を押し上げる要因となっています。オレゴン州クラマスフォールズでも2番刈りが終盤を迎えています。1番刈りは品質が良好で、カリフォルニア州の酪農家からの引き合いが強かったことから、産地価格が上昇しました。2番刈りは気温の上昇に伴い、1番刈りほどの高い成分値は確保できていないものの、価格は引き続き1番刈り並みの水準で推移しています。一方、PSW（カリフォルニア州）では、インペリアルバレーで5番刈りの収穫が進んでいます。高温の影響から成分値が低くなりやすく、低級品の発生が中心となっています。しかし、他産地での干ばつによる供給不足を背景に、これまで需要が弱かった低級品についても米国内からの引き合いが強まっています。さらに、中国・韓国向けを中心とした輸出需要も旺盛であることから、カリフォルニア州においても産地価格は上昇基調が続いています。今後については、各産地で収穫が進むことで供給量の増加が期待される一方、アイダホ州をはじめとする干ばつ地域への供給、米国内の酪農需要、アジア向け輸出需要が引き続きアルファルファの需給を左右するとみられます。現時点では、需要が供給を上回る状況が続いており、アルファルファ相場は当面、高値圏で推移する可能性が高いと考えられます。  ▲ クラマスフォールズ産アルファルファ 1番刈りプレミアム品  アメリカ合衆国の干ばつモニター (色が濃いほど乾燥度合いが強い) 2025年時と2026年時の比較 出典：U.S. Drought Monitor
米国産 チモシー	ワシントン州では、8月中旬頃からチモシー2番刈りの収穫が始まる見込みです。1番刈り終了後、一部ではチモシーから他作物へ作付けを切り替えた農家も見られますが、現時点では、多くの農家が2番刈りの収穫を行うとみられています。今年の1番刈りは、過去2年間と比べて上級品の発生が少なかったことから、良質なチモシーへの需要が強まっています。特に上級品については、安定した確保を求める引き合いが増えています。2番刈りは現在のところ生育が概ね順調に進んでおり、今後の天候に恵まれれば良品の生産が期待されます。一方、収穫時期の降雨は品質に大きな影響を与えるため、今後の天候と収穫状況には注視が必要な状況となっております。
カナダ産 チモシー	【レスブリッジ】 産地では7月は暖かく湿度の高い日が続いたため、1番刈りチモシーの収穫がほぼ完了しております。収穫期間中は一時的に不安定な天候や朝露の影響を受け、一部スタックでは軽微なブリーチも見られましたが、全体として品質は例年並みで大半が中級品以上となる見込みです。 【クレモナ】 産地では7月末時点で順調に収穫が進んでおり、このまま好天が続けば8月上旬までには収穫が完了する見通しです。今年は6月に十分な降雨があったことと、7月の湿潤な天候により圃場の状態は良好でした。そのため収穫量も不作であった過去数年を上回り、平年並みまで回復する見通しで、品質面も期待されております。
スーダングラス	主産地であるカリフォルニア州南部インペリアルバレーでは、26年産スーダングラスの1番刈りが概ね終了し、一部圃場では2番刈りの収穫が始まっています。7月15日時点の作付面積は20,590エーカーで、前年同時期比86%となっており、作付面積は前年を下回っています。また、中東情勢の悪化に伴う燃料費・肥料費など生産コストの上昇に加え、現地価格の低迷や日本向け需要の減少が続いています。このため、2番刈りまで収穫を進める圃場は限定的になると見込まれており、26年産スーダングラスの生産量は前年を下回ると予想されております。一方、各地のサブライヤーでは旧穀在庫を一定量抱えていることから、現時点では日本向けの輸出量について大きな懸念はないとされています。しかしながら、生産コストの上昇により収益環境は依然として厳しく、生産農家からは採算確保に向けた販売価格の引き上げを求める声が強まっています。
クレイングラス	クレインは全酪連の登録商標です。 主産地であるカリフォルニア州南部のインペリアルバレーでは2番刈りが終了し、3番刈りの収穫も開始しています。7月15日時点の作付面積は24,977エーカーとなっており、前年同時期比で109%となっています。今年はDIP（休耕地政策、以下DIP）へ参加する圃場が増加していることから、前年より早期かつ長期間DIPへ移行する圃場が増える見込みで、その影響から供給量は前年を下回ると予想されております。一方で、日本向け需要は堅調に推移しています。韓国向け需要はやや軟調に推移しているとのことですが、本来低級品はDIP明けに発生するため、発生量の少ないと予想されている今年は低級品の買付競争が激化する可能性があります。
ストロー類	アニュアルライグラスストローは7月初旬時点で刈り取りがほぼ終了しました。現地ではフェスクストローの収穫が進んでいます。両品目とも6月下旬の降雨の影響で、例年より色目にばらつきが見られております。これから収穫を予定しているペレニアルライグラスストローも降雨による倒伏が懸念されており、収穫期の天候が品質と収穫量に影響を与えそうな状況です。
豪州産 オーツハイ・ ウィートストロー	26年産は6月までに播種がほぼ完了しました。産地では4～5月の降雨により土壌水分は十分に確保されています。現時点で大きな生育被害はありませんが、エルニーニョ発生による東豪州の干ばつリスクや、西豪州の乾燥による減産が懸念されています。輸出需要は年初に比べると一時低下したものの、日本向け上級品需要や中国向け需要の回復により、足元では増加傾向にあります。一方、豪州国内は牧草の生育が良好で乾牧草需要は低調です。25年産の輸出向け低級品は引き続きタイトな状況で、今後は天候と26年産の生産量が市況を左右する見通しです。
総括	輸入粗飼料を取り巻く環境は、産地の天候や需給、輸出需要に加え、海上運賃や港湾混雑、燃料価格などの影響を受け、先行き不透明な状況が続いています。北米産粗飼料は良品を中心に需給は引き締まっており、産地価格は高値圏で推移しています。特にここ数年、現地価格が低迷していたアルファルファは米国内需からの引き合いが強くなったことで産地では買付競争が激化しており、注意が必要な状況です。今後も引き続き天候による生産量・品質への影響やコンテナ輸送環境に注視していく必要があります。

※粗飼料情勢の全文は弊社ホームページに掲載しています。



乳牛産地情報

令和8年9月1日現在

価格状況 ▲……強含み ▲……やや強含み →……横這い ▲……やや弱含み ▼……弱含み

札幌支所 TEL 011-241-0765
釧路事務所 TEL 0154-52-1232
根室駐在員事務所 TEL 01537-6-1877
帯広事務所 TEL 0155-37-6051
道北事務所 TEL 01654-2-2368

事務所	畜種	相場(万円)	価格状況	管内状況
札幌管内	育成牛(10-12月令)	25~35	→	札幌管内における8月中旬までの生乳生産量の前年比は、函館管内が月計97.6%、累計94.9%、苫小牧管内が月計100.7%、累計96.2%となっております。9月に出回る初妊牛は、11月下旬~12月中旬に分娩予定の牛が中心となります。秋分産から冬分産へと移行し、秋の導入に向けた需要の回復が予想されることから、相場は強含みで推移する見込みです。腹別では、F1腹、雌雄選別腹ともに確保可能です。頭数は限られておりますが、高能力・高成績の牛を多く取り扱える地域ですので、ご希望がございましたらお問い合わせください。育成牛および経産牛については、一定の需要が見込まれることから、相場は横ばいで推移する見込みです。
	初妊牛	60~70	↑	
	経産牛	45~55	→	
釧路管内	育成牛(10-12月令)	25~35	→	根釧管内における8月中旬までの生乳生産量の前年比は、釧路管内が月計101.2%、累計99.1%、中標津管内が月計101.6%、累計99.6%となっております。9月に出回る初妊牛は、11月下旬~12月中旬に分娩予定の牛が中心となります。暑さが落ち着く秋から冬に分産を迎える牛の出回りとなり、需要の回復が見込まれることから、相場はやや強含みで推移する見込みです。腹別では、F1腹、和牛受精卵移植腹、雌雄選別腹のいずれも、価格はやや堅調に推移する見込みです。育成牛については、夏生まれの牛の出回りが増加しますが、道内外からの需要が強いことから、相場は横ばいで推移する見込みです。経産牛については、即戦力となる牛への引き合いは引き続き強いものの、相場全体としては横ばいで推移する見込みです。
	初妊牛	55~65	▲	
	経産牛	45~55	→	
帯広管内	育成牛(10-12月令)	30~40	→	帯広管内における8月中旬までの生乳生産量の前年比は、月計100.6%、累計99.2%となっております。9月に出回る初妊牛は、11月下旬~12月中旬に分産予定の牛が中心となります。秋分産から冬分産へと移行し、秋に向けた需要の回復が見込まれることから、相場は強含みで推移する見込みです。F1腹への引き合いは引き続き強く、雌雄選別腹との価格差が生じております。育成牛については、夏分産が期待される月齢の牛の出回りが増加しますが、一定の引き合いが見込まれることから、相場は横ばいで推移する見込みです。経産牛については、引き続き需要が見込まれます。特に、産次が若く即戦力となる牛は、初妊牛と同程度の価格で取引されており、相場は強含みで推移する見込みです。
	初妊牛	60~70	↑	
	経産牛	60~70	↑	
道北管内	育成牛(10-12月令)	25~35	→	道北管内における8月中旬までの生乳生産量の前年比は、稚内管内が月計99.8%、累計98.9%、北見管内が月計102.4%、累計100.7%となっております。9月に出回る初妊牛は、11月下旬~12月中旬に分産予定の牛が中心となります。涼しくなる9月以降は各地で導入需要が高まると考えられますが、雌雄選別腹、F1腹ともに出回り頭数が多く、資源頭数も十分に確保できると予想されることから、相場は横ばいで推移する見込みです。育成牛については、夏分産が期待される生まれ月の牛が中心となります。資源頭数は少ないと予想されますが、一定の引き合いが見込まれることから、相場は横ばいで推移する見込みです。経産牛については、秋口にかけて即戦力となる牛への需要が高まり、道内需要も見込まれることから、相場は先月同様、横ばいで推移する見込みです。
	初妊牛	45~55	→	
	経産牛	30~40	→	
道内総括	育成牛(10-12月令)	30~40	→	道内全体における8月中旬までの生乳生産量の前年比は、月計101.0%、累計99.2%となっております。9月の情勢について、初妊牛は秋から冬に分産予定の牛の出回りが中心となり、搾乳用素牛への引き合いが強まる見込みです。初妊牛の出回り頭数は比較的多い時期となりますが、道内外からの需要が増加することに加え、将来的な資源確保に向けた育成牛への引き合いも継続していることから、相場は強含みで推移する見込みです。育成牛については、継続的な引き合いが見込まれるものの、相場は横ばいで推移する見込みです。即戦力となる経産牛については、地域による価格差はあるものの、産次が若い牛ほど引き合いが強いことから、相場は強含みで推移する見込みです。全酪連の搾乳用素牛導入事業では、皆様の牧場に適した牛を産地の庭先からお探しいたします。導入のご計画がございましたら、お近くの全酪連までお問い合わせください。
	初妊牛	55~70	↑	
	経産牛	45~70	↑	

今月の表紙



今月の表紙は「第16回酪農いきいきフォトコンテスト」に応募いただいた作品「共進会のヘアスタイルリスト」(宮城県 高橋駿太氏 撮影)です。

令和8年9月10日発行(毎月1回10日発行)

全酪連会報 9月号 No.732

●編集・発行人 飯島洋一

●発行 全国酪農業協同組合連合会

〒151-0053 東京都渋谷区代々木一丁目37番2号 酪農会館

TEL 03-5931-8003 <https://www.zenrakuren.or.jp/>

編集後記

- 今年は台風の発生が例年より早く、8月までに23号まで到達するのは統計史上2回目とのことです。各地で大雨や地震の被害も続いており、被災された皆さまに謹んでお見舞い申し上げますとともに、1日も早い復旧を心よりお祈りいたします。
- 秋は、全国各地でイベントが開催されますね。酪農の理解醸成や牛乳・乳製品の消費拡大PR等、一層力を入れて取り組んでまいります。
- 会報に関するご意見・ご要望等があれば、以下のアドレスにメールをいただければ幸いです。
shidoukikaku@zenrakuren.or.jp

今月の

らくのう

こどもギャラリー

入賞作品紹介



牛さんと桜

郡山市立行徳小学校 5年（東北） 嶋花

今月の入賞作品は…

郡山市立行徳小学校 5年（東北）の嶋花さんの作品です。

広々とした牧場の向こうに満開の桜並木が広がり、牛さんたちがのんびりと草を喰んでいる中でこちらをじっと見つめる一頭の牛さん。色彩豊かな画面に、モノクロの牛さんたちを魅力的な配置で描いた、春の空気を感じる作品です。



※この作品は本会と全国酪農青年女性会議共催の「第52回らくのうこどもギャラリー」で全国209点の応募作品から入賞12点に選ばれたものです。

主催 全国酪農青年女性会議